

## 「パウロ、ローマで宣教する」

2016年10月19日

使徒言行録 28 章 30 節～31 節 パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

パウロはローマ帝国の保護の下で、自費で借りた家に丸2年間住んだ。自費という費用はどこから調達したのであろうか。働いたのではないだろうから、収入はないはずである。豊かであったと想像される実家から仕送りがあったのか。あるいは、パウロを尊敬する諸教会から支援があったのであろうか。ローマにいながらローマ教会との関わりについては書かれていない。いずれにしても、訪問に来る人々を歓迎し、自由に交わりが持てる安心した環境で過ごしている。28 章 20 節 b に「わたしはこのように鎖でつながれているのです」と書いているが、実際に手足を鎖でつながれていたのではない。訪問者には自由に会えるような、軟禁状態であったのあろう。

幽囚の身のパウロの2年間の宣教は、どのようなものであったか。この間、エルサレムから訴える者が来たのか、ローマ皇帝の裁判はあったのか。それらについての記述はない。おそらく、エルサレムから来た者はなく、従って皇帝の裁判もなかったのではないか。使徒言行録の著者は最後に、「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」と簡略に記している。パウロは、フィリピ書 1 章 12 節～14 節で、獄中にある宣教について下記のように書いている。「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。」獄中における宣教が福音の前進に役立ったと述べている。パウロにとって置かれた場所はどこであれ、そこが宣教の最前線であった。訪問者への宣教も力強いものであったに違いない。

パウロは皇帝ネロの裁判を受け、釈放され、イスパニア宣教を果たしたという説もあるが、真偽のほどは分からない。伝説では、皇帝ネロによって首を刎ねられ殉教したとされている。殉教したことは確かであろう。

パウロはキリスト教界最大の宣教者で、彼の働きをどんなに高く評価してもし過ぎることはない。主イエスが表わされた十字架と復活の福音を民族の壁を越えて、全ての人々の救いであると宣べ伝えた。ひ弱で、病弱な体であったにもかかわらず、狂気のようになって宣教したことによって、キリスト教は世界に伝達されていった。使徒言行録は世界宣教の始めを記して、あなたも世界宣教の一地点に置かれていると励ます文書である。

ヨーロッパの教会に行くと、ペトロ像は「鍵」を持っている。マタイ福音書 16 章 19 節に「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける」と、神はペトロに鍵を授けたから、鍵を持っていることに納得できる。パウロ像は抜身の「剣」を持っている。エフェソ書 6 章 17 節に「霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい」と書かれている。パウロの語る神の言葉は剣のように鋭かった。だから、パウロ像は剣を持っているのであろう。私のパウロの印象を一言でいうと「自由」である。どんな場にあっても、愛において自由に語り、振る舞う。この自由があれだけのパウロの宣教を可能にしたと思っている。